

テゼの典礼

—「共同の祈り」の歴史、構造、意義—

打 樋 啓 史

はじめに

2005年8月16日、テゼでの夕の祈りの最中に、精神的な困難を抱えた女性によってブラザー・ロジェが刺殺されるというできごとは、テゼ・コミュニティに大きな衝撃と悲しみをもたらした。しかし、この創始者の死が、彼と共に歩んできたブラザーたちを立ち止まらせることはなかった。その後を継いで院長となったブラザー・アロイスを中心に、テゼ・コミュニティは、ブラザー・ロジェの遺した「広げていく」(widen)という言葉をもとに、自分たちの使命として受け止め、その後の歩みを続けてきた¹。

新院長アロイスとブラザーたちはこの5年半の間、変わらずテゼの丘にたくさんの方を歓迎すると同時に、より頻りにヨーロッパ、アジア、ラテン・アメリカの国々の諸都市で青年大会を開催してきた。また、世界の貧困な諸地域に派遣されたブラザーたちの働きに表されるように、困難な状況にある人々の側に身を置き、支援の働きを続けながら、神の平和を具体的に生きる道を模索してきた。このようにしてテゼ・コミュニティは、ブラザー・ロジェの意志と情熱を受け継いで、「神が例外なくすべての人を愛しておられる」という真実を明らかにする道をさらに「広げていこう」としてきたのである。

1940年代にコミュニティの基礎が築かれてから、このような今日の歩みに至

¹ Brother Roger, "Letter 2006, Unfinished Letter", p. 1 のブラザー・アロイスによる序言を参照。

るまで、ブラザーたちにとって変わることなくテゼのあらゆる活動の源泉として認識されてきたのは「祈り」、すなわち一日に三回捧げられる「共同の祈り」(common prayer)である。今日テゼの名を世界中に知らしめ、多くの若者たちをひきつける大きな要因となっているのも、このシンプルで美しい共同の祈りであろう。日本においてもテゼの共同の祈りは、人々が共に祈るためのひとつの形としてエキューメンカルな祈りの集いを中心に様々な場所で行き入れられてきた²。

しかしながら、テゼの典礼³としての共同の祈りがいかなる歴史的必然性から生み出され、それがどのような構造や意義をもつのかについて、十分に認識されていないことが多いのも事実である。それゆえ、共同の祈りの本質が理解されないままその形のみが模倣されたり、逆にこのような祈りの形が新奇なものとして敬遠されたりすることも少なくないと思われる。そこで本稿では、テゼの共同の祈りが生み出されてきた歴史的経緯、その典礼としての構造と内容、そして特にこの祈りに関してユニークな個々の要素の意義について、テゼのブラザーたちの言葉、またテゼに関して記された種々の文章、また筆者自身が過去に何度かテゼに滞在し、その祈りに参加した体験に基づきながら、論述していきたい。

2 かつて日本に滞在したテゼのブラザーたちの働きを受け継ぐ形で、テゼの歌を用いたエキューメンカルな祈りの集いが、長年にわたって全国各地で開かれている。この「黙想と祈りの集い」の詳細については、ホームページ (<http://mokusoutoinori.cocolog-nifty.com/>) を参照。

3 ブラザー・ロジェは、テゼがひとつの運動のように捉えられたり、人々がその名を用いた同好会のようなものを組織したりすることを拒否し、「『テゼの神学』(Taizé theology) や『テゼの霊性』(Taizé spirituality) といったものは、決して存在しない」(Brother Roger, *Festival* [Les Presses de Taizé 1973], p. 21) ことを強調してきた。これに照らせば、「テゼの典礼」(Taizé liturgy) というものも存在しないことになるであろう。それゆえ、本稿のタイトルとした「テゼの典礼」という表現は、あくまで「テゼで行なわれている典礼」(The Liturgy at Taizé) としての「共同の祈り」を指すものであり、何らかの特別な新しい典礼運動のようなものを示唆するのではないことを確認しておきたい。

1. 今日の共同の祈りに至るまで

一日に三回、朝、昼、夕に、テゼの丘にいるすべての訪問者は、祈りの時を告げる鐘の音に招かれて「和解の聖堂」に集まる。これら若者を中心とする何百また時期によっては何千もの人々は、そこでブラザーたちと共に歌い、祈る。繰り返し歌われる短い祈りの歌（meditative chants）や長い沈黙などから成るこの黙想的な祈りは、今日世界中でよく知られ、受け入れられ、この形式や音楽を用いた祈りの集いが世界各地で開かれている。

しかし、このようなテゼ独特の「共同の祈り」は、コミュニティの草創期から存在したものでなければ、一朝一夕に生み出されたものでもなかった。それは、テゼが世界中から多くの若者たちを迎え入れるようになるにつれて、「どうすれば、言語、文化、教派を異にする人々が一緒に祈ることができるのか」という問いの中から、長い間試行錯誤を重ねて、徐々に形を整えていったものである。

1940年、母国スイスからフランスの寒村テゼに移り住んだブラザー・ロジェは、そこで住居とするようになった家の階上の部屋で、一日に三回独りで祈った。戦後、最初のブラザーたちが加わり、1949年にテゼが修道会としての歩みを始めた時、ブラザーたちは司教の許可を得て、村のロマネスク建築の小さなカトリック教会で祈るようになった。「聖務日課」(office)と呼ばれたテゼの初期の祈りは、伝統的な修道会の典礼の形に沿ったものであり、すべてがフランス語で行なわれた⁴。音楽は、ユグノーの伝統から取られた賛美歌やジュネーヴ詩編歌が用いられると同時に、イエズス会のジョゼフ・ジェリノー神父がテゼのために作曲した答唱詩編が歌われた。歌、聖書朗読、沈黙、とりなしの祈りなどの要素から成るこの聖務日課の構造そのものは、より単純化された形で今日のテゼの共同の祈りに受け継がれている。

4 *The Taizé Office* (Faith Press, London 1966).

その後、ヨーロッパ各国から多くのブラザーたちが加わり、コミュニティは文化的多様性を増していく。それに伴い、1950年代末までには、ドイツ語の賛美歌がフランス語に訳されて日々の祈りで歌われたり、時折東方教会の聖歌が用いられたりするようになった。この時期にフランス語圏外からも若い巡礼者たちがテゼを訪れるようになるが、典礼で用いられる言語はなおすべてフランス語であった。

1960年代に入り、テゼを訪れる若者の数が劇的に増えたとき、コミュニティは本格的に次の問いに直面した。すなわち、伝統と歴史に支えられた典礼の質を損なうことなく、それらの若い巡礼者たちが祈りに参加できるようにするにはどうすればよいのか、という問いであった。答は即座には与えられず、その後何年にもわたって模索が続くことになる。いくつかの言語による聖書朗読が行われるようになり、各国の伝統的な賛美歌や典礼聖歌の使用が試みられたが、そこにいるすべての若者が祈りに参加できる方法は簡単には見つからなかった。

このような模索の中で、ブラザー・ロジェは常に若者たちのことを心にかけて、彼らがテゼでの祈りを十分に体験でき、キリストの愛にすぐに近づくことができるような「共同の祈り」が不可欠であるとの考えを強めていった。彼は当時、あるブラザーにこう語ったという。「もし私が若者であったなら、ここでの祈りで行なわれていることを理解するのは不可能でしょう⁵。」

1970年代半ば、ブラザー・ロジェから若者たちが参加できる祈りの方法を考える役目を与えられていたあるブラザーは、スペインのベネディクト会修道院で、各国からの巡礼者たちを迎えるため伝統的に用いられていた「カノン」という形式にヒントを見出す。シンプルで短いフレーズを繰り返して歌うカノンは、言語の壁を越えて人々を結びつけ、皆を祈りに参加させる力をもつものであった。そこでブラザーたちは、古くからの友人で音楽家のジャック・ベルティエに、ラテン語のカノンや繰り返して歌うための短い曲の作曲を依頼し、「カンターテ・ドミノ」や「ウビ・カリタス」などの曲が最初に誕生した。

5 Jason B. Santos, *A Community Called Taizé : A Story of Prayer, Worship and Reconciliation* (IVP Books, Illinois 2008), p. 107.

これらのラテン語の短い曲を何度も繰り返して歌うという祈りの方法は、テゼに集まった若者たちに大いに歓迎され、曲目が少ない頃には一曲が20分間にわたって歌い続けられることもあったという。以後、ベルティエとブラザーたちとの共同作業によって、さらに多くのラテン語の曲が作曲され、やがてフランス語、ドイツ語、英語など現代語の曲も作られ、テゼでの祈りに取り入れられていった。

1970年代末までは、テゼの夕の祈りは基本的に二部から構成されていた。つまり、従来からの伝統的なフランス語の典礼の部分が前半にあり、これら短い曲を繰り返して歌う祈りが後半に続き、これは若者たちによって夜遅くまで続けられた。1980年代初め、ブラザー・ロジェは、若者たちがより十分にコミュニティの祈りに参加するためには、これら二つの部分をひとつにすることが必要であると考えた。伝統的な修道会の典礼と短い歌の繰り返しという新しい形の祈りをバランスよく結合するのは、決して容易なことではなかったが、80年代半ば頃には、新しく作られた短い歌が伝統的典礼の大部分を補うものとなり、80年代終わり頃までには、今日テゼの共同の祈りとして知られている形が整えられるに至った。1994年にベルティエが逝去した後は、何人かのブラザーたちが祈りの歌を作曲し、今日もさまざまな試みと吟味を重ねつつ、常に新しい歌が歌われている。

このようなテゼの共同の祈りの歴史を概観するとき、何よりも注目すべきは、ブラザーたちの若者たちへの共感、また牧会的/司牧的配慮から、このような祈りが形成されてきたということであろう。さまざまな国から集まった、異なる言語、文化、教派的背景をもつ若者たち、修道会的典礼についての特別な知識や体験をもたない若者たちが、誰一人傍観者になることなく、積極的にコミュニティの典礼に参加し、一つになって祈れるということ。そして、その祈りを通して、若者たちが神の愛の真実に近づくことができ、人生にとって最も本質的なものに目覚めた生き方へと自らを整えていけるということ。そのためには、修道会的典礼の美しさと意義を薄めてしまうことなく、同時によりシンプルで誰もが参加しやすい祈りの形が必要であった。そのような祈りの可能性を探し

求めるブラザーたちの情熱と創意によって、テゼの共同の祈りは形作られてきたのである⁶。

このように自らの祈りの形を変化させていったテゼの姿勢は、ブラザー・ロジェの表現を借りれば、「暫定性の力学」(The Dynamics of the Provisional)⁷に基づくものであると言えるだろう。それは、自分たちが未完成の貧しい者であることを常に自覚しつつ、より本質的なもののために変化していくことを恐れない旅人の心、そこにある躍動性のことである。それはまた、最も大切なことのためには、自分たちが慣れ親しんできたものへの執着を捨て、新しい道を大胆に選び取っていく勇氣と自由のことである。このような福音に根差した力学こそが、テゼの共同の祈りを可能ならしめたのである。

2. 共同の祈りの構造

テゼで一日に三回捧げられる「共同の祈り」は、朝、昼、夕によって多少の異同はあるものの、おむね次のような順序で進められる。始めの歌、詩編、聖書朗読、沈黙、とりなしの祈り、主の祈り、院長による結びの祈り、終わりの歌。先述のとおり、このような祈りの構造そのものは、修道会の伝統的な聖務日課/教会の祈りに共通するものであり、諸教会で「ことばの典礼」や「礼拝」と呼ばれる集会の流れと大きく異なるわけではない。以下、これらの要素について個別に見ていきたい。

始めの歌：祈りの時を知らせる鐘が鳴りやみ、聖堂に沈黙が訪れると、一人

6 典礼学者フィリップ・トビーは、テゼが多くの若者たちを迎え入れる中でこのような祈りの形を生み出してきた意義について、以下のように記す。「これは計画されたミニストリーではなかった。コミュニティは、それらの巡礼者たちが参加できる礼拝を取り入れることを強いられてきたのである。しかし、最も意義深いのは、多くの教会で聖餐式に代わるものとしての祈りの集いが停滞状態にある中で、テゼはユニークな形でエキニカルな共同の祈りの再生をもたらしたということである。」Philip Tovey, 'Liturgy and Ecumenism: Three Models of Development', in: P. Bradshaw and B. Spinks (eds.), *Liturgy in Dialogue* (SPCK, London 1993), pp. 68-85. 引用はp. 84より。

7 Brother Roger, *The Dynamic of the Provisional* (Mowbray, Oxford 1981).

のブラザーが始めの歌の旋律を歌い始め、一同がそれに加わり歌う。「アレルヤ」や「主をほめたたえよ」など、賛美の歌が用いられることが多いが、朝、昼、夕という一日の時間帯によって、また教会暦によって、ふさわしい曲が選ばれる。このような賛美の歌が一曲か二曲繰り返し歌われるなか、祈りは始まっていく。

詩編：続いて、詩編が歌われる。詩編の言葉を何人かのソリストが歌い、それぞれの節の後で一同は「アレルヤ」などの短い答唱を歌う。ここでは、テゼで初期の頃から用いられてきた、ジェリノー神父作曲の答唱詩編が用いられることも多い。そもそもテゼは最初から詩編を歌うコミュニティであった。その意図は、あるブラザーによって次のように記されている。

イエスはその民が昔から大切にしてきた祈りの言葉で祈られました。キリスト者はいつもその中に命の泉を見出します。詩編は、私たちがあらゆる世代の信者たちとの大きな交わりの中に置きます。私たちが抱くのと同じ喜び、悲しみ、神への信頼、渇き、そして苦悩さえもが、詩編の中には表現されているのです⁸。

なお、テゼでの共同の祈りでは、一つの詩編の全体が用いられるわけではなく、皆が理解しやすい、いくつかの節のみが選ばれて歌われる。

聖書朗読：続いて、聖書朗読が行われる。一人のブラザーが、聖堂中央部のブラザーたちが座っている空間の後方にある朗読台へと移動し、一同は体をそちらに向けて、みことばの到来を待ち望む。聖書はフランス語か英語で読まれることが多いが、その時の訪問者の状況によって別の言語が用いられることもある。朗読台での朗読の後、一同はその箇所の中核となる短い部分が他のいくつかの言語で読まれるのを聞く。

朗読はテゼの聖書日課に従って行われるが、説明を必要とする難しいテキストではなく、誰もが理解しやすい短い箇所が用いられる。共同の祈りの中で難解で長いテキストが読まれると、若者たちがそれを集中して聴くのは困難であ

8 Taizé, *Prayer for Each Day* (Cassell, London 1997), pp. 1-2.

り、それは彼らが神のことばと出会うことの妨げになるからである。祈りに参加する人々が、本質的で短いことばに集中して耳を傾け、それを心で味わい、黙想することをテゼは大切にしている。朗読の直後、短い答唱が歌われる。これには、テゼが初期の頃から歌ってきたフランス語の典礼歌が用いられることが多い。

沈黙：これに続いて、皆を沈黙へと整えるための黙想的な繰り返しの歌が歌われ、一同は沈黙のときの中に入っていく。7分から10分程度続くこの沈黙は、テゼの共同の祈りの、そしてテゼでの生活全体の中心また源泉である。その意味については後述したい。

とりなしの祈り：沈黙の後、とりなしの祈り（共同祈願）が捧げられる。いくつもの短い嘆願が、数人のソリストによって、いくつもの言語で歌われ、その間一同はハミングでそれを支える。それぞれの嘆願の後、皆が「キリエ・エレイソン」（主よ、あわれみたまえ）やそれと同等の他言語の言葉などを答唱として歌う。この謙遜な祈りによって、一同の心は広げられ、人類の悲しみや苦悩、喜びや希望を、そして特に世界の隅々で見捨てられ、忘れられた人々のことを、神に委ねようとする。

ユーカリスト：昼と夕の祈りでは、この後また短い繰り返しの歌が歌われるが、朝の祈りでは、とりなしの祈りの後で「主の祈り」が歌われ、続いて参加者はユーカリスト（聖餐）に与る。この聖餐は朝の祈りの中で聖別されるのではなく、早朝に小聖堂で行なわれるカトリックのミサ、プロテスタントの聖餐式で、それぞれ既に聖別されたものが配られる。カトリックの聖体を受ける人は聖堂内の何箇所かに立っているブラザーたちの所に向かい、プロテスタントの聖餐は、「パーマネント」と呼ばれるテゼに長期滞在して働く若者によって、決まった場所で配られる。正教会の司祭がテゼに滞在している時には、正教会の青年たちのため、別の機会に聖体礼儀が執り行なわれる。

また、パーマネントの青年が聖餐とは別に「祝福されたパン」を入れた小さな籠を持って聖堂内の何箇所かに立っており、何らかの理由で聖餐に与らない人はこれを受けることができる。このようにして人々がユーカリストに与る間も、

短い歌が繰り返して歌われる。

結びの祈り：祈りの締めくくりとして、院長によって「結びの祈り」が唱えられる。かつてはブラザー・ロジェが、現在はブラザー・アロイスが、短い黙想の言葉を読み上げる。いわゆる派遣や祝福の祈りではなく、より黙想的な内容のもので、参加者のその後の内なる歩みを支え励ますための祈りである。

終わりの歌：その後、何曲かの歌が続くなか、ブラザーたちは聖堂を退出していく。しかし、その後もさらに歌は続けられ、参加者はそれぞれ適切な時に祈りを終えて、退出することができる。特に夕の祈りでは、ブラザーたちが出て行った後にも、多くの若者たちが聖堂に残り、夜遅くまで歌による祈りは続けられる。その間、ブラザーたちは聖堂内の壁沿いの何箇所かに立って待機しており、若者たちは彼らの所に行って、個人的悩みや内面的模索について話することができる。

週末の十字架と復活の記念：毎週金曜日と土曜日の夕の祈りで、「過越の神秘」すなわちキリストの十字架と復活が記念されることは、テゼの典礼のひとつの特色となっている。

金曜日の夕の祈りでは、「十字架を囲む祈り」が捧げられる。院長による結びの祈りの後、歌が始まると、数人のブラザーが前方に置かれた大きな十字架のイコンを運んできて、聖堂中央の床に横たえる。はじめにブラザーたちがそれを囲んで沈黙の内に祈り、ブラザーたちが退出した後、訪問者たちが順番に十字架に近づき、額を十字架の上に置いて祈る。この間、特にキリストの苦しみや十字架をテーマとした短い歌が繰り返して歌われる。

十字架を囲む祈りは、ロシアのキリスト者たちが昔から苦しむ人々、特に無実でありつつ獄中にいる人々と連帯して祈るために大切にしてきた方法で、1978年のブラザー・ロジェらによるモスクワ訪問を機にテゼでの祈りに取り入れられた⁹。最初は年に一回、聖金曜日/受難日にものみ行なわれていたが、やがてブラザー・ロジェはこれを毎週金曜日に行なうことを決め、現在の形に至っ

9 *Choose to Love: Brother Roger of Taizé 1915-2005* (Les Presses de Taizé 2007), pp. 99-102.

ている。額を十字架の木の上に置いて、沈黙の内に祈るという謙遜な仕方、若者たちは自らの重荷、また自らの周りの人々の重荷や苦悩を十字架のキリストに委ねようとする。

毎週の十字架を囲む祈りの導入後間もなく、ブラザーたちは復活の祝いを同じく毎週行なうことが必要であると考えようになった。そうして、土曜日の夕の祈りに、「復活前夜の光の祭り」が取り入れられた。聖堂に入る際に各々がロウソクを受け取り、祈りの終わりの部分で喜びの歌が歌われる中、聖堂内にいる全員のロウソクに火が灯されていく。何百、何千ものロウソクの光の中で共に歌い祈ることは、若者たちにとってかけがえのない体験となる。それは、異なる大勢の人々が復活のキリストの命と光の中でひとつに集められていることを視覚的に感じ取る体験、そうして「ひとつの教会」を垣間見る体験と言えるだろう¹⁰。

以上、テゼでの日々の祈りや週末の祈りの各要素について記してきたが、最後に一つの大切な点に触れておきたい。それは、テゼの共同の祈りはすべて、いわゆる「司会者」不在で行なわれるということである。共同の祈りには、開会や閉会の言葉、次に何が行なわれるかといった説明の言葉などは一切用いられず、すべては歌によって自然でスムーズな流れの内に進められていく。当然、祈りがそのように滞りなく展開されるためには、その背後で、担当のブラザーたちの細やかな配慮に基づく周到な準備がなされている。しかし、それら祈りの進行に携わる人々の存在は隠されている。テゼ・コミュニティは、人々が祈

10 聖公会のカンタベリー大主教ロワン・ウィリアムズは、昨年8月にテゼに滞在した際に、テゼが自分にとって「教会を見ることが出来る場所」であることについて、ブラザーたちに次のように語った。「私たちはほとんどの場合、教会を制度的な形においてのみ理解し、礼拝する共同体としての形においては十分に見ていません。ここテゼという場所では、教会がその最も中心的なリアリティにおいて理解されます。私はよくこの話をするのですが、あるキリスト者が『私はテゼで初めて教会を見ました』と言ったのを聞いたことがあります。その人は、長い間教会に通い、聖書を読み、祈りを唱えてきたのですが、本当の意味で教会を見たことがなかったというのです。その教会とは、新しい創造としての教会、新しいエルサレムとしての教会、人類の希望としての教会のことです。」テゼのウェブサイトに掲載された記事 (http://www.taize.fr/en_article_8248.html) を参照。

りを通して心を神に向けること、人間の言葉ではなく神のことばに心を開き、神の語りかけに耳を傾けること、ただそれだけを望んでいる。それゆえ、人間による余分な言葉がそこに入り込むと、それは祈りを妨げ、人々と神との出会いを遮断するものになってしまう¹¹。

もちろん、テゼの生活の中で、共同の祈り以外の時間には、様々な言葉が語られる。毎日午前中にはブラザーたちによる聖書の講話が行なわれ、それに続く小グループでの話し合いでは皆が自分の言葉で自由に語り合う。午後にも種々のセッションや文化交流などが行なわれている。しかし、そのような中で、共同の祈りの時間は、皆が人間の言葉を超えた次元に身を置くひとときとして聖別され、それがテゼでの生活の中心として、他の要素と連動しながら機能しているのである。

3. 共同の祈りの特徴

これまで述べてきた共同の祈りの基本的構造と内容を念頭に置きつつ、次にこの祈りに関して特にユニークないくつかの点について、より詳細にその意義を考えてみたい。

祈りの場としての「和解の聖堂」

既に言及してきたように、共同の祈りはテゼの丘に建てられた「和解の聖堂」(The Church of Reconciliation)で行なわれる。村のロマネスク教会では訪問者たちを収めきれなくなったため、1962年に建てられたこの聖堂は、その後も増え続ける訪問者を収容するために何度か拡張されてきた。多くの若者たちは、この聖堂の中に入るとき、その空間のもつ雰囲気によって圧倒され、その心は自然と自分を超越する大いなる存在へと向けられていく。聖堂の中は薄暗く、前方の祭壇には、天井から聖霊の炎を想起させる大きなオレンジ色の壁布が何枚か吊る

11 Jean Kockerols, 'La Liturgie à Taizé', *La Maison-Dieu* 255 (2008), pp. 47-61. この点についてはp. 54を参照。

されている。その下には大地と労働を想起させる簡素なブロックが積まれ、その中にたくさんの小さなカップロウソクが置かれ、無数の炎が揺らめいている。聖堂内の何箇所かにはいくつかのアイコンが飾られ、ブラザーたちによって制作された何種類かのステンドグラスも聖堂に彩りを与えている。祈りと典礼に無関係なものは、一切置かれていない。

テゼ・コミュニティにとって、この祈りの場の美しさは共同の祈りに不可欠のものである。豪華できらびやかな美とは異なり、静けさと謙遜に満ちた美、そこに入る人を暖かく迎える歓迎と分かち合いの美を、この空間は見事に映し出している。テゼ以外の場所で祈りの集いが開かれる時にも、ブラザーたちは常にその空間をシンプルで暖かい美に彩られた場にしようと工夫する。ブラザー・ロジェは、このような祈りの美、また祈りの空間の美について、次のように記す。

神の神秘が、あまりにも多くの言葉によって窒息させられることなく、わずかなシンボルの単純素朴な美によって垣間見られるとき、共同の祈りは、単調で退屈なものになるどころか、私たちを地上における天上の喜びに目覚めさせます¹²。

聖堂内には教会で用いられるような長椅子は置かれておらず、基本的にブラザーたちと訪問者はカーペットが敷かれた床の上に座って祈る。もちろん、それが困難な人のために椅子も準備されている。聖堂の中央部にブラザーたちが座る空間があり、その周りに若者を中心とする訪問者たちが座る形になる。白い修道服をまとったブラザーたちの存在そのものが、祈りの中でひとつのしるしとなり、彼らを見る人々の心をキリストに向ける役目を果たしている¹³。

共同の祈りの最中、聖堂内にいる人々は皆正面の同じ方向を向き、互いに向

12 *Prayer for Each Day*, p. v.

13 ブラザー・ロジェは、1954年に記された『テゼの会則』の中でこう述べている。「典礼の時に身につける衣服は、私たちの全存在がキリストによっておおわれていることを思い出させるものです。それはまた、言葉以外のもので主への賛美を表現する方法となります。」*La Règle de Taizé* (Les Presses de Taizé, 1954 et 2010), pp. 14-15.

き合うことはない。これは、祈りが人間相互に向かうものではなく、同じ神に向けられることの表現となり、人々は聖堂正面の美に目を注ぐことによって、その向こうにある大いなるものへと心を集中させていくのである。

繰り返しの祈りの歌

テゼでの共同の祈りを最もよく特徴づける短い祈りの歌を繰り返して歌うという方法が、多様な訪問者たちが共に祈るための手段として生み出されたものであることは既に述べた。ここでは、この歌による祈りのもつ意義について三つの面から考えたい。

第一に、このような祈りの歌は、ブラザーたちが最初から意図したとおり、異なる言語や背景をもつ多くの人々を祈りの内にひとつに結び合わせ、人間的なレベルでの交流を超えた、より深く霊的な交わり/コミュニオンをもたらす力をもつものである。

短い言葉が何度も繰り返し歌われるので、若者たちはそれが自分の母国語以外の言語であっても、いつしか歌えるようになる。特に音楽の才能に長けていなくても、シンプルなメロディなので、繰り返し歌う内に口ずさめるようになる。また、皆で共に繰り返し歌い続ける中で、若者たちは自分が歌うだけではなく、他者の歌声に耳を傾けることができ、自分の声が様々な声の調和の中に置かれ、他の人々の声によって支えられていることを発見する。歌い疲れたら、しばらく皆の声に耳を傾け、それに励まされてまた歌い出すことができる。これはまさしくコミュニティの体験である。

また短くシンプルな歌の繰り返しであるがゆえに、パートに分かれてハーモニーをつくることもそう難しくないし、いくつかの楽器によって歌を彩ることも可能である。

第二に、テゼの歌の歌詞は、ほとんどが聖書、特に詩編から取られた言葉であり、それを繰り返して歌うことは、そのことばを黙想するきわめて有効な手段となる。こうして、信仰の本質を表現した短い言葉を繰り返し歌うことは、とりもなおさず神のことばに深く耳を傾ける営みとなる。若者たちはことばを

繰り返し歌うことによって、それを言わば咀嚼し、呼吸し、やがてそのことばの真実は歌う者の全存在を満たしていく。その意味で、よく指摘されるように、テゼの歌による祈りは、古くからキリスト教の伝統の中で重んじられてきたレクティオ・デイヴィナ（靈的読書）のひとつの形であると言えるだろう¹⁴。

第三に、このような祈りの歌は、共同の祈りの時間が終わった後、若者たちがそれぞれの日常に戻ったときにも、心の奥深くに宿り、個人の祈りを支えていくものとなる。

これらの祈りの歌は、働いているときにも、誰かと話しているときにも、休んでいるときにも、私たちの心の沈黙の中で響き続けます。こうして、祈りと日々の生活はひとつになるのです¹⁵。

こうして短い繰り返しの歌による祈りは、終わることのない祈りとして意識を超えたレベル、内面の深みで持続し、その人の存在を最も本質的なことに目覚めさせていく。東方の修道者たちの伝統の中で、このような祈りは「心の祈り」と呼ばれてきた。イエスの名を呼び求める短い言葉を何度も繰り返し、それを自らの呼吸としていく「イエスの祈り」はその代表的なものである。テゼの歌による祈りも、このような心の祈りとしての意義をもつ¹⁶。そして、そのような祈りを典礼の要素として取り入れ、その道を多くの若者たちと分かち合ってきたという点に、テゼの独自性が見出されるだろう¹⁷。

14 テゼのウェブサイトに掲載された、あるブラザーによる“*Young adults and prayer at Taizé*”という文章 (http://www.taize.fr/en_article3148.html) を参照。

15 *Prayer for Each Day*, p. 8.

16 西方の伝統では、「ロザリオの祈り」がこれに類似したものとして挙げられる。「心の祈り」としてのテゼの歌の意義については、Olivier Clément, *Taizé : A Meaning to Life* (GIA Publications, Chicago 1997), pp. 51-53; “*Young adults and prayer at Taizé*” (http://www.taize.fr/en_article3148.html) を参照。

17 Kockerols, ‘*La Liturgie à Taizé*’, p. 53を参照。

沈黙

テゼでの共同の祈りの核心となるもの、それは間違いなく、聖書朗読の後に続く長い沈黙であろう。驚くべきことは、黙想や内省についての知識や体験をほとんどもたない若者たちが、この沈黙の時間を本当に静かに、深い次元で過ごしていることである。聖堂内に何千もの人々がいる時にも、10分ほどの間、深い沈黙が完全にその場を満たすのはきわめて印象的である。

このような沈黙は強引に作り出された心の状態ではない。共同の祈りの中でこれに先立つ歌や聖書朗読などすべての要素が、祈りの場にいる人々を沈黙へと整え、そこに招く役割を果たしている。そのような祈りの流れの中で、皆はごく自然に、あらゆる言葉を超えた形で、ただ神の現存の中に身を置くことができる。いわば、典礼で用いられるすべての言葉は、この沈黙の中での神との交わりを方向づける役目を果たしているのである。ブラザー・ロジェは、パウロやアウグスティヌスの言葉を用いながら、こう記している。

神は、人間のどんなことばも理解されます。沈黙のうちに神の近くに留まること、それはすでに祈りです。口は閉じていても、心が神に語っています。そして、あなたの思いをはるかに超えて、聖霊によって神があなたの内で祈っておられるのです¹⁸。

この言葉に示されるとおり、若者たちはこの沈黙のなかで、内面的に何かを成し遂げることを要求されるのではない。ただ、沈黙して単純にそこに身を置くということ。何かを行なうことだけが評価されがちな日常の中で、あえて立ち止まり、ただそこに存在するという。それで十分なのである。

テゼ・コミュニティは、このような単純素朴な沈黙によって、人が信頼の内から自らの存在を神に委ねることができ、神の現存の内に留まることができると

18 Brother Roger of Taizé, *No Greater Love: Sources of Taizé* (Geoffrey Chapman Mowbray, London 1991), p. 44. 邦訳は、ブラザー・ロジェ著、植松功訳『テゼの源泉—これより大きな愛はない』（ドン・ボスコ社 1996年）、93頁。

確信する。たとえそこで何も感じることができなくても、このような沈黙を通してこそ、神は言語を超えた形で人の心に語りかけ、神の愛と現存がその人の存在の深みに宿るようになることを確信している¹⁹。

このような深い静けさに満ちた沈黙の時間を、共同の祈りの中で他の多くの人々と共に過ごすことは、若者たちにとってきわめて新鮮で力強い体験となる。

祈りと生き方の一致

ブラザー・ロジェはキリスト者間の分裂を乗り越える道を探し求め、またこのキリスト者間の和解を通して、人類の中にある対立のいくつかでも乗り越え、人々の苦悩をいくらかでも和らげることができればと願って、テゼ・コミュニティを創始した。そして、テゼが最も大切にしてきたのが、修道会の伝統に基づく観想的な祈りの道と苦悩する人々と連帯し和解を作り出していく道を不可分の、一つのものとして生きることであった。テゼは、このように自らが目指し、また若者たちと分かち合おうとしてきた方向性を、「内なる命と人間の連帯」(Inner Life and Human Solidarity)という言葉で言い表してきた。それゆえ、テゼでの祈りは、決して個人の中だけで、この世界における具体的な課題と無関係なところで自己充足的に完結するものではない。ブラザー・ロジェは記す。

祈りは、私たちをこの世から遠ざけるものではありません。反対に、祈ることほど責任を伴うことはありません。単純で謙遜な祈りに専念すればするほど、よりいっそう愛することへと、そしてその愛を生き方で表現することへと導かれるのです²⁰。

テゼのブラザーたちは、テゼに滞在した若者たちが帰途に着くとき、彼らがそこで見出したことを基に、それぞれの国の自分の生活の場で、地域、職場、

19 Kathryn Spink, *A Universal Heart: The Life and Vision of Brother Roger of Taizé* (Second Edition: GIA Publications, Chicago 2005), pp. 157-158を参照。

20 Brother Roger, "Letter 2005, A Future of Peace", p. 3.

学校、家庭などで、具体的に平和と信頼を生きていくように励ます。ブラザーたちにとっては、「テゼ」という名前ではなく、若者たちが新しい心で和解を生きる道を選んでいくこと、これこそが重要なのである。

テゼでの祈りは、常にこのように具体的に平和と信頼を持ち運ぶ生き方と不可分のものである。このような祈りと生き方との一致は決して単なる理念でもなければ、観念的なものでもない。テゼでの共同の祈りそのものが、つまりその構造や内容、そこで用いられる言葉、静けさと暖かさに満ちた雰囲気、そこで与えられる神の愛との出会い、たくさんの異なる人々とひとつになって祈る体験などが、人を和解に向けた生き方へと備える基本的方向性とダイナミズムを有している。テゼにとって祈りとはまず自分の内に始める平和の業であり、この内なる平和は生き方を通して、見える形で他者と分かち合われていくものである²¹。

おわりに

以上、テゼでの共同の祈りの歴史、構造と内容、意義について論述してきた。この共同の祈りが世界中の多くの若者たちを魅了し、各地で主に若者たちによってテゼの歌を用いた黙想的な祈りの集いが開催されていることは既に触れたとおりである。また、この数十年、世界中の諸教会の賛美歌集や聖歌集にテゼの歌が多く取り入れられ、礼拝や諸集会で歌われるようになってきた²²。このようにテゼが作り出してきた祈りの形が、教会の典礼・礼拝に新しい息吹を吹き込み、

21 ブラザー・アロイスもまたこう記す。「神への渴きを自分の中に浸透させるということは、自分を取り巻く世界の事柄から離れることではありません。反対に、この渴きは、他の人たちが創造の恵みを味わい、生きることの喜びを見出すために、自分に可能なことすべてを行なおうとするのです。」Brother Alois, "Letter 2010, Letter from China", p. 2.
22 日本の教会の場合、テゼの歌は、日本基督教団『讚美歌21』（日本基督教団出版局1997年）に15曲、日本聖公会『聖歌集』（聖公会出版 2006年）に8曲が収められている。また、カトリックの出版社から出された日本語訳のテゼの歌集『すべての人よ、主をたたえよ：テゼ共同体の歌』（サンパウロ 1999年）は、諸教会での集会、またエキュメニカルな祈りの集いなどで、広く用いられている。

大きな影響を与えてきたことは確かである。

このようにテゼの歌が教会の集会で歌われるとき、テゼ・コミュニティが歌による祈りによってどのような典礼/礼拝を作ろうとしてきたかを思い起こすことができれば意義深い。つまり、誰にとっても理解しやすく、参加しやすい典礼。様々な違いをもつ人々が、ひとつになって心を合わせることができる典礼。人が、難解さ、複雑さ、多すぎる言葉によって妨げられることなく、心の深みで神の愛に出会うことを助ける典礼。個々の内面的な模索を支え、一人一人が祈りながら平和を生きていくことを励ますような典礼。テゼは、そのような典礼としての共同の祈りを模索してきたのであり、今日も若者たちと共にこの祈りを守り続けている。

教会に連なる人々、特に礼拝・典礼を準備する責任をもつ人々にとって大切なのは、テゼの用いてきた形をそのまま真似ることではなく、このように皆に開かれた、そしてまた霊的な深さと美しさを備えた典礼を探し求めていったテゼの心から学ぶことではないだろうか。